

2022年5月

課題本 『蓮如 -われ深き淵より-』

五木寛之/著 中央公論社 1996年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

作品名に従うと「蓮如」である。しかし、私の中では「蓮如上人」なのだ。文芸作品と言えども、史実としての存在を抜きがたい。蓮如上人の筆として証明されるものが作品の背後に透けて見えて、虚実の混じった蓮如のセリフは読みにくかった。

今、ロシアのウクライナ侵攻や、衰える気配のないコロナ禍が、人々の心の蓋をずらして揺すぶってくる。心の底に潜んでいたものの薄気味悪さが、ひたひたと流れ出て、人間の持つ深淵を隠せなくなっている。蓮如上人のおられた1400年代も、飢饉や戦乱などで世の中は荒れていた。この動乱の時代は、蓮如上人にとって、自分の本来の姿と帰るべき基盤を求めさせる大きな機縁となったはずだ。心の底からあふれて出てくる手に負えないもの、それを仏教思想では「煩惱」と呼ぶ。

蓮如上人は、「平座」「講」など特有の表現はされたけれど、新しい思想を編み出されたわけではない。蓮如上人の眼前には、常に150年前の親鸞聖人の生涯があった。

蓮如上人を物語として捉えた五木寛之氏の文中では、蓮如が自分のことを、罪悪は深重、具縛の凡夫、無明の下類と語るのも「煩惱」の言い換えである。これらの言葉は親鸞聖人の使われた言葉でもあった。しかし、その内容を深めていくことは、何百年経とうとも如何に難事であることか。

五木氏は、まず、「煩惱」を蓮如の性欲を通して描いていく。5人の妻、27人の実子があった歴史上の蓮如上人には驚かされるが、避妊知識や衛生知識もなかった時代のことである。蓮如はそれを浅ましい姿という。しかしその「煩惱」は、目鼻のように当たり前のもの。恥じるものではなく、その当たり前のことを浅ましいと潜ませて善人面をする不真実こそ、自分の「煩惱」の正体なのだ。と突きつけて五木氏は物語を始めた。性欲だけではない。除夜の鐘の百八つは、「煩惱」の数だと伝えられているし、八万四千と数える例もある。最小でも千は下るまい。千手観音像を拝むとその手に見とれる。千の手で救わなければならない「煩惱」が千は有るということか、と。

親鸞聖人は、そうせざるを得なくなったら人はどんなことでもするだろう、それが「煩惱」の姿だと言われる。「煩惱」に抗えない自分を見るにつけ、「地獄こそ、どう考えても自分のすみかだ」と親鸞聖人は言われた。

親鸞聖人の言葉は、これに限らず、責め、悲嘆する言葉が多い。しかし、それはすべて親鸞聖人自分一人について言われていることである。隣人と比べて言われていることではない。常に、「私の煩惱は、私一人に於いて」という厳しいまなざしがある。

五木氏は、親鸞聖人と蓮如の姿勢を描き分ける。

〈親鸞聖人は、ただひとり、冬の枯野を歩いて行かれるヒジリだ。そして念仏の種をまかれた〉
〈蓮如は萌えはじめたその芽を、枯れないように育て、鳥に突っつかれないように守り、正しく大きく伸ばして豊かな実をつけさせるために仏に呼ばれたお人〉となる。

五木氏の蓮如像は、蓮如の実母が残した「しんらんさまについていきなされ。ねんぶつをひろめなされ」という言葉に導かれた生涯として創られている。

蓮如上人の母は、蓮如上人 6 歳のときに姿を消した。以後あうことはなかった。それ故に劇中での母の言は不動である。不動となった母の言葉が蓮如の生涯を貫いていたことになる。

親鸞聖人も、阿弥陀仏の教えをわかりやすく伝えたいと苦心されたが、蓮如上人の「ふみ」(手紙であり、現在は御文章とかお文と呼ばれている)の数の多さにはとうてい及ばない。蓮如上人は、法語書簡を 46 歳の頃から書き始め 85 歳で亡くなる前年まで書き続けられている。その総数は分からないそうだ。活字印刷のない時代では、受け取った人から人へ書き写されていく。文字表記もずれて、原本の特定も難しい場合もあるという。総数は膨大なものになるだろうと研究者の間ではいわれている。

五木氏は〈たくさん衆生と共にいることで、ようやくさびしさを忘れ、安心できる男なのだ〉と蓮如に語らせ、船の舳先に座して行く手を見定める親鸞聖人に指図を任せて、自分は大勢の恋しい人々と共に漕ぎに漕いでいくのだと心の丈を述べさせている。縁のある人々を念仏の兄弟と呼ぶ蓮如像を、五木氏は、蓮如のセリフによって示そうとしている。「ふみ」は法語書簡ではあるが、具体的で、現実的な問題に触れるものもある。

だが、文章を書いて居るだけでは、生産性は見えない。いくら寝食を忘れて「ふみ」を書こうとも、現実に体を動かして働く方が見える形になる。その方がよほど気持ちを楽しめるという誘惑があって蓮如を悩ませる。しかし、蓮如が選んだのは、手紙(「ふみ」)を書き、親鸞聖人の示された道をお同行(どうぎょう)にわかってもらったことだった。「わしは今夜も、ふみを書く」。蓮如の苦しい決断である。蓮如上人の手紙は、形を整えて浄土真宗の流れをくむ家庭に今も伝えられている。

親鸞聖人や、その教えを継いでいった蓮如上人が、世間から秩序を乱すものとして指弾されたのは、「悪人正機(あくにんしょうき)」という考え方である。善人でも仏になるのだから、悪人の成仏は言うまでもないことだ、というのだ。世間からは、善悪が逆だろうと攻撃されている。親鸞聖人の善人悪人は、法律や道徳上の善悪の裁きではない。自分自身を深く見つめたとき、覆い隠している自分の「煩惱」に気がつけば、悪人と言わざるを得ない身と知る。そういう「煩惱」の深さに悩む身こそ、仏が光を投げかける一番の相手なのだと言わう言葉である。親鸞聖人の言葉にであった人々は、悪人こそ正機(まさに目当ての人)であり、その悪人は自分であり、自分こそ仏様に喚ばれている人間だと気付かされるのだ。

また、蓮如上人が心を砕いたのは、「異安心」と呼ばれる解釈の異なる同信の人々だった。「悪を犯せば犯すほど救われる」「念仏を唱えていさえすれば何をしても良い」という風潮を「異安心」と言う。蓮如上人は「それは違う」と「ふみ」を書き送る。こういう「異安心」にであうと、切なくて、寂しかったであろう。御文章は、蓮如上人が、教え諭すというより、心の底からさびしゅうてたまらぬ思いで語りかけられたものと感じる。

五木氏の蓮如上人を讃仰する気持のにじんだ作品だと思う。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 Y T 】

今回の本は戯曲の形式でしたが、読みやすかったです。蓮如上人は人間味があり、仏法を広めるために尽力された方で、今、落ち着かない日々が続く中で、少し光が見えた気がしました。

『蓮如』を読んで

◆【 TK 】

五木寛之さんの著者はどうして仏教関係がこんなに多いのかと思っていたところ、読書会で五木寛之さんの生い立ちを詳しく教えられて、なるほどと納得致しました。そして今ロシアからの残虐なニュースが伝えられて五木寛之さんが幼少期に心を痛めた事とだぶってしまいました。

時代劇小説が苦手な私はこの本の内容がよくわかりませんでした。宗教というものには派閥、宗派がどうしても出てくることはわかります。同じ聖典を読み頑張っているにもかかわらず実践の仕方に関して意見が様々出てきてお互いを否定していくのです。

更に宗教は戦争、争いのきっかけになりやすくなっています。

とにかく戦争のない平和を願うこの頃です。

◆【 R子 】

私は、蓮如上人の御文章の中の「白骨の章」を父からずっと聞いて育ってきました。だから、蓮如上人がどんな思いで書き残されたのか気になっていました。

蓮如上人は、聖人という思いでしたが人間の持っている悩みやしんどさと闘いながら、書き残していくという作業をあの時代にしているところがすごいと感じました。

私事ですが、今回の突然に近い兄の死と重なり、白骨の御文章の中の「われや先 人や先・今日ともしらず明日ともしらず、…」の言葉通り、人間生まれたら必ず死んでいく。どう生きてどう別れていくかを考えさせられます。吉川先生の白骨の御文章を聞きながら兄と亡くなった父母を頭の中に描きながら気持ちが楽になるのを感じました。ありがとうございました。

◆【 K子 】

二年越しの課題本です。昨年度はコロナの影響で読書会が中止になりました。この作品を放置(?)するにはあまりにも…と思い、今年も取り上げていただきました。

五木寛之さんの戯曲です。活字(目)と映像(頭)と二度美味しい作品です。蓮如の壮絶な生き様が描かれています。

民衆の心に染み渡る、誰れもが理解しやすい仏教を広めるため「ふみ」「文」を作成する苦悩が渾渾と描かれています。

われ深き淵よりと副題がついています。

このわれ＝五木寛之さん自身かも知れません。深き淵＝作者が心の奥底にかかえているもの。蓮如は六歳の時母親が彼を残して寺を去ります。作者は十一歳の時母親と死別しま

す。(この別れはあまりにも悲惨でした。)現在のウクライナの戦争でも五木さんの母親と同じ悲劇が起こっているかもしれません。二つの深い淵がうまく絡められているのではないかと思います。

私がうまく絡められないものがあります。

蓮如には四人の妻子ども十七人です。このエネルギーも「文」の作成の為のエネルギーだったのですかネ？

蓮如の母親が寺を去る時、彼に言い残した言葉。

「しんらんさまについてゆくじゃ」そして「おねんぶつをひろめなされー」

六歳の時から生涯この言葉を抱き続けたのでしょう。

とてもインパクトのある言葉、私の心にも強く刺さっています。

◆【 MM 】

「人の煩惱こそは念仏の種」「百万人にひとり、いや千万人にひとりの業を背負った男と見た。もしも時を得たならば、その業の深さが力となって、世の多くの人々を信心にみちびく仏縁となるやもしれん。だが、蓮如どの、人はすくえても、自分はなかなか浄土に安住はできぬぞ」「他力念仏の船に人々をのせて、光の岸へとこぎだす船頭は、自分はなかなか浄土の岸にあがることはできぬのじゃ。もしあがったとしても、おのれはいちばん最後の最後。だか、衆生を運ぶ念仏の船路に最後はないぞ。されば地獄は一定わが棲家と覚悟を決めて生きるがよい」

第一幕での鳥辺の座頭の言葉が印象的だった。座頭のこれらの言葉から副題の「われ深き淵より」のイメージが湧いてきた。人々に親鸞の教えを広めるにはどうしたらいいか。貧困や大切な人たちとの別れ、様々な危機的状況など困難な時でも決めたことに向き合う、立ち向かう。道の途中には人から理解されないこともあった。しかしやるべきことが自分の中にあるから流されずやるべきことをやるだけだ。そのうちに人がついてくる。状況も変わってくる。

先月の課題本では主人公が自分の中にもものさし、芯がなく他人の視線や意見に流されていた。今月は「ブレない。それは自分の中に芯となるものがあるから」と感じた。蓮如の芯となるものは母が残した言葉「ただ、しんらんさまについてゆくじゃ。そして、おねんぶつをひろめなされ」だろうか。6歳の時に別れた母。母に感じていた温もりを妻にも感じていたのか、だからたくさん子どもを儲けたのか。

略年表を見てびっくりした。本の中では蓮如の第二夫人までしか出てこなかったが実際には5人を妻に迎えている(子供は27人!)。子どもをたくさん儲けたんだなあと思っただけで思っていたら27人もいた。亡くなる前年にもひとり生まれている。元気すぎる。妻たちは子どもを産むたびに体に負担がかかり弱っていく…最初の妻如了も次の妻蓮祐(如了の妹)もそうして命を削っていった。母と幼い時期に別れた蓮如は母のぬくもりを女性に求める。寂しさ、不安を埋めるため?命を生み出すために妻は自らの命を削る。「(負担をかけて)すまない、許してくれ」と蓮如は口に出すことはあってもまた子どもができる。妻たちはそれが幸せと口をそろえて言う。そう言わせるだけの人間的魅力があるのだろう。確かに完全無欠よりはなにか突出したり抜けているとそこが魅力に映ることはある。しかしまあ元気だわねえと思った。80代に4人生まれている。「人の煩惱こそは念仏の種」座頭の言う通りだと感じた。